

Editor's Note

講評

今年度、卒業論文は7編提出されました。

恋愛関係における嫉妬対処行動を自己愛と魅力差の認知との関係において検討した高野くんは、昨年度の藤田美貴さんの成果を受けながら、別の視点から嫉妬の問題を展開させました。一昨年度、1年間海外留学の後、色々な努力、骨折りを重ねたこと、最終的には秋以降の急激な勉学へのチュウチュウ的な打ち込みがあったことが論文取りまとめの完遂につながったと思います。

いわゆる認知のバイアスに関する自発的特性推論を再学習法で検討した須田さんは、昨年度、いわゆる単純接触効果に関する研究で、我が国ではかなり評価の高かった先行研究の再現を試みたけれど、どんなにパラメータをいじっても全く結果が再現できないという不運に見まわれ、また時間的な制約もあって卒論の提出ができませんでした。今年はその経験を踏まえて、テーマに関連する文献の質をよく検討し理解のレベルを高めることで、この分野でほとんど最新のトピックスに関する研究をまとめることができました。

山口さんは、防犯意識の形成に関与する要因を個人の性格特性（犯罪不安傾向）、環境（住居地の犯罪発生率）そして個人の経験（犯罪被害経験）という三つの側面から検討しました。プレ卒研究では、犯罪目撃者の記憶変容のような刺激特性などが影響を及ぼすかを研究していましたが、4年生になってテーマを変更したためにかなり時間的にタイトな進行となりました。一般に卒業研究は、途中のテーマ変更は大きなハンディとなりますが、何とか時間内に完成させることができました。

堀越さんは、3年次から一貫して幼稚園児の記憶研究、とくに虚記憶の現象を扱ってきました。発達初期における記憶研究は、その科学的価値と重要性は誰かが認識しているものの、実際に幼児を対象として高次な認知的機能を研究するにはきわめて多くの困難に直面します。幼稚園児の虚記憶に関する先行研究が世界的にもごく少数で、しかも決定的な結果を得たものが無いのはその困難の深刻さを反映しています。そんな難しいテーマに対して、並外れた忍耐力を以ってよく立ち向かったと思います。

堀田くんは、怒りと攻撃性の問題に2年間取り組んできました。古くから心理学においてこの問題は中心的な研究テーマであり続けていて、膨大な研究蓄積がある領域です。怒りを喚起する刺激条件、怒りに関わる生理的機構など多岐にわたる先行研究の中で、それらに幻惑されることなく怒り反応と実行機能との関係に焦点を当てながら、合わせて心臓血管系の生理反応を測定するという形で研究を進めました。そこで得た知識と経験は4月からの警察官という仕事に役立つものと期待されます。

今井さんは、2年間にわたり幼児の運動機能の発達と認知機能の発達の関係を追跡してきました。この研究テーマは、最近になって従来とは異なる観点、すなわち新しい神経科学的な知見や進化心理学的な観点に基づいて、欧米を中心に活発に研究されていますが、わが国ではまだ研究が活発とは言えません。また数少ない先行研究もコントロールの厳密さに難があったり、あるいは単発実験でかつ結果の考察が希薄だったりの問題を持つ傾向がある中、新しい仮説に基づく網羅的な検討を行ったことは大いに評価できると思います。

大岡くんは、研究室配属以来一貫して「嘘」に関わる欺瞞性の認知をテーマとして研究してきました。嘘研究では、嘘をつく側の問題を扱う分野、嘘がどのように発見されるかを扱う分野などが主な領域ですが、他人がしゃべっていることをその真偽とは無関係にどの程度嘘っぽく思うのか、それに関係する要因を明らかにしようとするものでした。このテーマに関する先行研究は限定的で、方法論的にも多様性が小さい傾向がありました。それらの研究に比して、得られた結果は、当初の目論見ないし仮説とは一致しないものの、重要な一石を投じるものとなったと思います。

今年度、残念ながら研究法論文は年報締め切りに間に合う提出が1本もありませんでした。それぞれにやむを得ない理由や事情があったかと思いますが、近年にない淋しい状況となりました。来年度は各自、余裕をもって計画を立て実験を進めてきちんとした論文をまとめて欲しいものです。期待しています。

（2014年2月28日 山上 精次）